
勇者ファー。

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者ファア。

【Nコード】

N7807K

【作者名】

i m a i w a

【あらすじ】

勇者ファアは魔法使いミィを伴って魔王に挑むことになった。

（前書き）

気楽に書きました。

「勇者様〜！」

即座に振り向くファア。

これだけ込み入った人だかりの中で、ファアは躊躇泣くその声に振り向いた。

はつきり言って自信過剰……いつもの事だけど。

「どうした？」

禿頭の年嵩の男性がファアと話しはじめた。

真剣な眼差しで男の一句一句を丁寧に拾うかのように頷きを繰り返している。

金色の短く切り揃えられた髪が、さわさわと風に揺れている。

私はその間、街道沿いにある石の出っ張りに腰を下ろした。

足元に大きな布地の袋を投げ捨てた。

半端じゃなく重かった。女に荷物を運ばせる非情なファア。

おかげで私の腕は少し太くなってきた。

右手に木の杖を持っているけど、そろそろ大剣でも持てそうな勢いだ。

「ミー爺さんが１００万バル出すからこの荷物運んでだってよ」

「１００万バル!?」

ありえない……

こんな小包を運ぶのに１００万バルって。

そ、それに、そんなのなぜ勇者様に、いえ、ファアに頼むんだろ。

あ、怪しい、きな臭い。

「そのおじいさんは？」

「どっか消えた、金だけはもらったがな、ハハハ」

この馬鹿……やらかしましたよ……

「まあ、どっかに捨てちゃえば……いいか」

「そっいうわけにもいかないんだ、報酬渡すかわりに竜王の剣を担

保に渡しちゃった。仕事こなさないと返してくれないって」

竜、竜王の剣って、ファアの商売道具じゃない！？」

しかもあれは、物凄く苦勞して化け物の巢から持ち帰った、時価数千万バルは……

と、そこで私の思考は途切れた。

真白になった頭でバルの握っている小包をナイフで開けた。

木彫りの蛙ちゃん、あらかわいい……じゃないって！

「ど、どうするのよ！ これからどうやって商売請け負うのよ！」
傭兵渡世でなんとか生きてきた私たち。

もうだめかもしれない。

あの剣がなくなつて、どうやって凶悪な魔物を倒せば。

「なーに、この宿屋のオヤジからもらった銅の剣でなんとか！」

無邪気に笑うファアを見てたら毒気が抜けていった。

全く危機感のない屈託ない笑顔は不思議と私に安らぎを与えてくれる。

まあ、いいか……苦勞するのは本人だし。

私は溜息を一つついて、勝手に先に歩き出したファアを追った。

「おっちゃん、なんかいい仕事ない？」

今、このソラの街にあるハンターギルドに仕事を求めてやってきた。
た。

「ああ、あるよ、魔王と一騎打ちなんてどうだい？」

「おっ……」

「ちよつとまつたー」

その先をファアに語らせるまでに、彼の肩を引つつかんで後ろに引き寄せた。

「じよ、冗談言わないで！ 竜王の剣がないばかりか、相手は魔王よ！ 勝てるわけないでしょ！」

私は力説した。たぶん、一生分くらいの全身全霊をこめて彼を説

き伏せようとした。

しかし

「大丈夫さ……お前もいるし……なんとかなる」

ファアの瞳はいつになく頼もしい輝きを宿していた。

吸い込まれるように私は彼の瞳に見入ったまま、思わず無言で頷いてしまう。

は！？ しまった……

「おっちゃん、それ任せてくれ、俺が退治してやんよ」

「そうか……分かった……」

おっちゃんが哀れな人を見る目をしていた。

そう、死にゆくファアを暖かく見送る目つきだ。

「やっと着いたな」

「ぜえぜえ……」

こんな大事な仕事でさえ、私にこの荷物を持たせてあなたは軽装備……

ファアは爽やかな顔で汗一つかいていない。

私は額の汗を白い布地を何度も押し当て拭った。

何でこんな奴に私は着いていくんだろう。

そんな気持ちが頭の隅をよぎるが、すぐに答えが返って来て納得させられる。

こんな奴でも好きなんです……

「じゃあ、行こうか！」

手を差し伸べられたので、試しに重い袋を渡そうとすると交わされた。

よく見る……

素直に手を置くと、力強い腕が私を目の前の黒い塔の扉の中へ引っ張り込んだ。

「さあ、ここだー」

「うん……」

赤い仰々しい扉を開け放つと、中へ転がるように入り込んだ。
ファアはまさに前転を繰り返して入っていく。

魔王らしき人が可笑しな人を見る目つきをしていた。

私は恥ずかしさで少しだけ彼と距離を置いた。

「何者だ!?」

「お前に名乗る名などない！」

ファアは言いはなつと同時に、私の手に持つ袋を引たくった。

一瞬かくと、動きが緩慢になったけど、再度加速して一気に魔王に詰め寄った。

「くらえ！」

大きな黒尽くめの魔王に、袋から何かを投げつけた。

「これは？」

透明の球が魔王の目の前ではじけたかと思うと、液体の飛沫が魔王の顔にかけられた。

「目があああ」

「なにしたの？」

大きな体を苦しそうに折りたたみ、魔王は悲鳴を上げていた。

「塩酸だよ……ヒヒヒ」

魔王は手を振り回していたが、もう何も見えないようだった。

私はファアの非道ぶりに青褪めて立ち止まっていた。

「馬鹿！ 魔法だ！」

視力が失われた魔王を剣で突きまくるファア。

甲高い金属音がこだまするが、ファアの攻撃はきいてなさそう。

私は呪文を唱え、火の球を何度も何度も魔王にぶつけた。

格闘すること3時間、やっと魔王は地に伏せた。

「勝ったー！」

私たちは手を取り合って、その場で踊るように回っていた。

と 部屋の奥から大きな足音が。

「どうした、部下A」

「.....」
ぞろぞろ足音が聞こえると、私たちは塔を駆け下りていった。
こうして、初めての魔王城ツアーは無事に？ 終わった。

（後書き）

オチがいまいち浮びませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7807k/>

勇者ファースト。

2010年10月8日15時22分発行